

早春の上州紀行－富岡、桐生、碓氷を訪ねて－

高橋 祐吉

「近代化遺産」を訪ねる旅へ

専修大学の社会科学研究所は毎年度夏と春に調査旅行を企画しており、そこに私がよく顔を出していることは、既にブログでも紹介済みである。そして、出掛けるたびに旅日記や紀行文、見聞録とでも言ったような、そんな類のあまりまとまりのない文章を気儘に綴ってきた。いまさら言うまでもないことではあるが、研究所の調査旅行は物見遊山ではないので、そこには何らかのテーマが掲げられることになる。当然のことであろう。これまでは4回にわたって北前船の航跡を辿る調査旅行を続けてきたのだが、その企画も昨年終了した。そんなわけで、今年からは新しいテーマでの調査旅行となるわけである。どんなものになるのか少しばかり気になってはいた。

私とは言えば、研究所の調査旅行であればどこにでも出掛けて行くほど真面目な人間ではないので、参加するかしないかはテーマ次第のところがある。このところの私の最大の愉しみ事は、老後の道楽として始めたブログを書き継ぐことなのだが、そんな人間からすると、ブログに投稿し続けたいようなテーマが設定されるといいのだが、などと勝手に思っていた。企業や産業の動向あるいは自治体の課題などに関する実態調査だと、研究者を廃業した身としては、文章を綴る意欲が沸きにくい。新しいことに関心を持つことが、何となく億劫になってきているからだろうか。しかしながら、歴史に関わるようなテーマであれば何故だか心が動くのである。生来の性癖とでも言えばいいのか。研究所から送られてきた企画書には、今回の調査旅行の趣旨が次のように書かれていた。

2021年度春季実態調査は、「近代化遺産を通して学ぶ社会変化」をテーマとする。JR高崎駅を起点として群馬県内の近代化遺産を訪問し、近現代における社会変化について考える企画としたい。今回の実態調査は、2020年度春季実態調査と同様に、できるかぎり「密」を回避しつつ実施したい。個別の企業や事業所への訪問が限定されるもと、施設見学を中心としつつも特色あるプログラムとなるよう企画を検討してきた。

初日はJR高崎駅に集合し、著名な世界遺産である富岡製糸場を訪問する。続いて、こんにゃくパークを訪問し上州の歴史と食を実感する。二日目は、「織都」桐生市を訪問し、近代化遺産とまちづくりについて、地元で活動してきた人々の案内のもとで学ぶ。三日目は、現代にも活

きる「織」につながる「糸づくり」について碓氷製糸での見学から実態を学び、午後は鉄道遺産を活かした碓氷峠鉄道文化むらを訪ね「鉄分を補給する」企画としている。

社会科学研究所としては、群馬県は実態調査での「未踏地」であり、コロナ禍での制約が近代化遺産と北関東へ目を向けるきっかけとなった。2022年度夏季実態調査は、継続企画として桐生地域から足尾や日光方面への企画を構想中である。実態調査について制約の大きい状況が続いているが、多くの先生方に関心を持っていただければ幸いである。

研究所から参加予定者に送られてきた企画書には、以上のようなことが書かれていた。別に小生のような年寄りの興味や関心などが考慮されて設定された企画だというわけでは、勿論ない。だが、何とも嬉しくなるようなテーマの設定ではないか。キーワードは「近代化遺産」であり「社会変化」である。しかも、このテーマに関する調査がこれから先も続くところ。そうであるならば、この機会にあれこれと資料を収集して、読んだり調べたりしながら毎年のように雑文を綴れそうな気もしてきた。調査旅行への参加意欲が一気に高まったことは言うまでもない。年寄りなのに（いや、年寄りだからか）相変わらず「現金」なのである。

そんなわけで、研究所で研究会担当を務めておられる教員の方々に、素直に感謝の意を表すことにした。それにしても、群馬が社研の実態調査において「未踏地」であるとか、碓氷峠鉄道文化むらを訪ねて「鉄分を補給する」といった表現には、苦笑を禁じえなかった。何となく秘境にでも出掛けるかのような書きっぷりだったし、「鉄分」の補給といった言い回しにも、遊び心がたっぷりと滲み出ているように思われたからである。私はといえば、真面目一辺倒ではない、こうしたゆとりや軽みのある文章が大好きである。

上記のような経緯があって、3月の1日から3日にかけて群馬県内をあちこち廻ってきたので（最終日には、群馬と埼玉の県境にほど近い埼玉県の深谷に一人で泊まったのだが、そのわけについては最後に補遺で触れてみたい）、「早春の上州紀行」と題してこれまでのように雑文を綴ってみることにした。調査旅行に出掛けて移動しながら目的地を順次訪ねていくのであれば、旅日記も旅程に沿って綴っていけばいいので、ある程度書きやすいのだが、一定のエリア内で関連施設をあれこれ見学している場合には、どうもこれまでと同じようには書きにくい。一工夫必要である。もっとも、私のような年寄りが書く雑文なのだから、どう工夫したところでそれほど面白いものにならうはずもないのだが…。

群馬県の旧国名は上毛野国（こうずけのくに）であり、その異名が上州あるいは上毛となる。ついでに書いておけば、群馬県の群馬は馬とは何の関係もない。昔の車郡の「くるま」に由来しているとのこと。上州と上毛を群馬の人はどう使い分けているのかよくは知らないが、私にとって馴染みがあるのは上州の方である。では、上州と聞いて人は何を思い浮かべるのであ

うか。私の場合は、上州国定村の国定忠治であり、上州新田郡三日月村の木枯らし紋次郎（原作・笹沢佐保）である。本人は小心者の秩序派に過ぎないので、その結果、逆にアウトローに親近感を抱いてしまうのであろうか。あるいは、ただの俗物だからなのか。

高崎から両毛線に乗ると、桐生駅の近くに国定という名前の駅があるので、忠治はこの辺りで生まれたのであろう。赤城山からさほど離れていない場所である。役人に追われてこの山に立て籠もった忠治が、子分たちを前に「赤城の山も今宵かぎり」と語る科白は、よく知られている。紋次郎が生まれたという三日月村は、創作上の架空の村であるが、新田郡は今では太田市に合併されており、駅名に名前を残してはいないものの、実在した地名である。忠治も紋次郎も、一昔前であれば誰もが知っていたはずだが、今時の若い人たちにはまったく馴染みのない存在となっているのかもしれない。

1970年代初頭の木枯らし紋次郎人気にあやかって、太田市にはテーマパークまで作られたらしいが、果たして今はどうなっていることやら。紋次郎に倣って、「あっしにはかかわりのないことをござんす」と言うしかないのだが…。群馬では新田と言えば新田義貞が想起されるようである。だが、こちらの人物には私はまったく関心が沸かない。楠木正成なども同じである。両者ともに歴史上の人物として著名ではあるが、私にとってはどうでもよい人物に過ぎない。もしかしたら、昔からの皇室嫌い、皇国史観嫌いと関係があるのかもしれない。こちらが狷介で偏狭な人間なので、それもやむをえなからう。

高崎から富岡へ

また上州と言えば、上州名物の「かかあ天下と空っ風」もよく知られた言い回しである（「か」の付く言葉ということで、「雷」も上州名物とされているようだが…）。ここで言う空っ風とは、冬に赤城山から吹き下ろす風のことで、「赤城おろし」とも言われている。そう言えば、私の育った福島でも、冬に吹く風を地元の吾妻小富士に因んで吾妻下ろしと言っていた。吾妻下ろしも冷たい風だったが、これだけ有名なところを見ると、上州の空っ風はその比ではないのだろう。

ところで、気になるのは「かかあ天下」の方である。世間的には妻が所帯を支配し夫の家庭内での力が弱いことを指しており、亭主関白と対で使われている。私などは「かかあ天下」という言葉がどのようにして生まれてきたのかといったことなど何も考えずに、上州の女は気が強いのだろうぐらいにしか思っていなかった。だが、どうもそういったことではないらしい。先の「赤城おろし」の所為もあって上州の冬は寒く、厳しい自然環境と土地の貧しさ故に、昔から養蚕業や製糸業、織物業が盛んだった。そして、そこでの仕事は主に女が担うものとされてきた。近代に入ると、女の働く場は大小の製糸場へとさらに広がっていった。そのために、

懸命に働き稼いでくれる妻を見て、男どうしが自分の女房は天下一だと自慢し合ったというのである。それを聞いた他所の土地の人間が、「かかあ天下」だと冷やかしたらしい。そんなことで、「かかあ天下と空っ風」といった言い回しが生まれたようだ。桐生で手にしたパンフレットには、働き者であった上州の女たちを、「時代をリードするパイオニア的存在」であったとまで持ち上げていた。ちょっと「褒め殺し」のような気さえしないではなかったが…。養蚕や製糸や織物の仕事で働いていた女性たちの現実、果たしてどのようなものであったのだろうか。

それはともかく、先のような話からすると、「かかあ天下」は一見女を褒め讃えた男たちの何とも優しい言葉のようにも思えなくはない。だがそれはことの反面であろう。「かかあ天下」の裏には、女の稼ぎに寄りかかって遊び暮らす、俗に言う「ヒモ」のような男たちの姿も、見え隠れしているのではあるまいか。妻の働きで養われている夫のことをよく「髪結いの亭主」などと言ったりするが、そんな亭主にも例えられるような男たちが向かった先は、あろうことか博打であった。上州には、五街道の一つである中山道をはじめ三国街道（中山道の高崎から分かれ、越後の寺泊に至る街道）や日光例幣使街道（東照宮に貢ぎ物を捧げるために勅使が通った街道）など多くの街道が走っており、主立った宿場町には飯盛り女もいたし、賭場も開かれていたようである。男たちは、天下一のかかあが稼いだ金で博打を打っていたという。その残滓は今でもあるようで、群馬には競輪場（前橋）、競艇場（桐生）、オートレース場（伊勢崎）（以前は高崎に競馬場もあった）があり、パチンコ店も結構多いのだという。私は何も知らなかったが、世間ではギャンブル県として知られているらしい。

私は旅行は好きだが趣味という程でもない、群馬に限らず何処とも縁は薄いのだが、それでも群馬にはこれまでに四度ほど足を伸ばしたことがある。そのうちの三度は温泉行である。私が育った福島もそうだが、群馬も温泉が多い県として知られており、私も昔伊香保温泉や四万温泉や水上温泉に出掛けた。伊香保温泉に泊まった時には、ついでに榛名山に登り榛名神社にも行ってみた。また、嬭恋村にあった大学のセミナーハウスにもゼミ合宿で泊まったことがあり、帰路に浅間山の鬼押出しにも寄った。すべて懐かしい思い出である。私の場合は、群馬との繋がりはその程度に過ぎないが、家人と群馬との縁はかなり深い。母親は桐生の生まれで、家は風呂屋を営んでいたという。家人の話によれば、母親は風呂屋の看板娘だったようで、群馬大学の学生たちにも人気があったらしい（その群馬大学にあった同窓記念会館も今回眺めてきた）。桐生には親戚もいたために昔家人は何度か訪れており、堤町にある水道山公園も動物園も覚えていた。そしてまた、働き者だった家人の祖母は、子守奉公の後機織りもやっていたとのことであった。

調査旅行に話を戻してみよう。初日は高崎駅に集合することになっていた、私は東京駅から上越新幹線で高崎に向かった。旨い弁当を食べながら浮き浮きした気分で電車に乗って

たので、あっという間に目的地に着いた。当初は、自宅からクルマに乗り関越自動車道を通って高崎に向かうのも妙案ではないかなどと考えたりもしたが、クルマだと諸事情で慌てたり焦ったりする可能性もあるような気がして、諦めることにした。年寄りには慎重なくらいで丁度いいのだろう。群馬については先のような知識しかないので、私にとっても言わば「未踏地」のようなものである。知らないところに出掛けることになると旅の愉しみは増すが、それは誰しも同じであろう。しかも、研究所の調査旅行では貸し切りバスで目的地を廻るので、落ち着きのあるゆったりした気分で見聞を広めることができる。私のような年寄りにはもってこいである。できるだけ身軽な旅装を心掛けて、ふらりと出掛けることにした。

新幹線の座席にはいつも薄い冊子が置かれているので、乗れば必ず広げる。昔からの癖である。そうしたら、沢木耕太郎が「記憶のかげら」と題した巻頭エッセイを書いており、これが最終回だとあった。タイトルも内容も興味深い一文だったので、その結論部分だけをここで紹介してみることにしよう。沢木が言う「誰に対しても同じ態度で接する」という「生き方の基本」は、私にとっての基本でもある。偉い人をやたらに見上げたりする気もないし、只の人を平気で見下したりする気もない。

私が人に会い、人から話を聞いたり、話をしたりするというを中心にした仕事を続けてきた中で、もしひとつだけ心がけてきたことがあったとしたら、それは誰に対しても同じ態度で接するということだったような気がする。人によって態度を変えない。たとえどれほど「偉い」人であっても、あるいはそうでないように思われる人であっても、同じように接する。もしかしたらそれは、単に仕事の上のことだけではなく、私の生き方の基本のようなものになっていたかもしれない。その生き方における大切な心構えは、驚いたことに、ほんの数分だけ会ったにすぎない、井深さん（ソニーの創業者の一人である井深大のこと一筆者注）の影響だったかもしれないのだ…。

初日の昼過ぎに高崎駅前に集合したところ、今回の調査旅行で会うのを楽しみにしていたUさんが、コロナがらみでのやむを得ない事情のために、急遽参加をキャンセルしたということだった。何とも残念であった。すぐにメールで遣り取りしたが、彼もたいへん残念がっていた。われわれは、貸し切りバスに乗ってまずは世界遺産としてよく知られた富岡製糸場に向かった。そこは思った以上に広いところだった。この世界遺産を巡る話については、後で詳しく触れるつもりである。ガイドの学芸員の方の丁寧な説明を聞きながら富岡製糸場をたつぷりと見学した後、高崎に戻る途中に甘楽（かんら）町にある「こんにやくパーク」に立ち寄った。ここでは、入場者はさまざまな工夫を凝らしたこんにやく料理を無料で食べさせてもらうことができ

る。「幻想も抱かず、幻滅もせず」なども「生き方の基本」としている私は、それほど期待もせずに食べ始めたのだが、意外にもなかなか旨かった。腹いっぱい食べても太らなそうなので、つついとお代わりまでした。こんにゃくの食感もたらした旨さなのであろう。

「上毛かるた」考

こんにゃくパークに貼ってあった何枚かの「上毛かるた」のポスターを見ていたら、素朴な絵に興味を沸いた。そこで、売店でこのかるたを購入した。上州名物としてよく知られているのは、先にも触れたように「かかあ天下と空っ風」であり、俗世間に遍く知られた著名な人物と言えば、国定忠治（他に関八州一の大親分と言われた大前田英五郎などもいる）であったりするが、かるたには空っ風はあってもかかあ天下はないし、勿論忠治もいない。内村鑑三や新島襄、田山花袋に加えて、関孝和、塩原太助、新田義貞まで登場しているのだから、私としては、忠治ぐらいは入れて欲しかったのだが…。

かるたは子供向けのものであろうから、どうしても品行方正とならざるをえず、清く正しく美しくなってしまうのであろう。親分や侠客や博徒の出る幕はない。読み札の裏に解説文があるのもユニークである。いま絵札の絵に興味を沸いたと書いたが、絵は水彩画で小見辰男という前橋出身の画家が描いている。絵でいいなあと思ったのは、繭と生糸であり、清水トンネルであり、尾瀬沼であり、富岡製糸場であり、伊香保温泉であり、ねぎとこんにゃくであり、赤城山である。こんな素朴なかるたが今でも売店に置かれているところを見ると、きっと広く県民に親しまれ愛されているのであろう。今であれば、「上州名物上毛かるた」という札を作ってもいいのかもしれない。

先程「上毛かるた」に国定忠治が抜けているなど書いたが、これはまあ冗談半分である。真面目に不思議だったのは、県都前橋出身の詩人で詩集『月に吠える』や『青猫』で知られた萩原朔太郎の札がなかったことである。私などが言うまでもなく、日本の近代詩を語るうえで忘れてはならない人物である。たまたま高崎駅の構内にあった本屋で、上毛新聞のコラムを集めた『詩（うた）のまち「前橋」ものがたり』（上毛新聞社、2020年）を目にした。地方に出掛けた時には、いつも大きな本屋に立ち寄り郷土関連の出版物のコーナーを眺める。そうすると、ときどき面白い本が見付かることがある。先の本もそんな一冊である。はしがきには次のようなことが書かれていた。

群馬は明治以後、多くの詩人、歌人、俳人を輩出してきたことから、「詩の国」「詩のふるさと」などと呼ばれます。なかでも前橋のまちからは、萩原朔太郎をはじめ、平井晩村、高橋元

吉、萩原恭次郎、伊藤信吉ら全国に知られる数々の優れた詩人が生まれ、大きな仕事を残しました。さらに北原白秋、室生犀星、若山牧水、草野心平ら県外の錚々たる詩人、歌人たちが来訪、来住し、交流を繰り広げました。これほどの密度の濃さは他に例がないでしょう。前橋のキャッチフレーズのひとつとして使われている「詩（うた）のまち」にふさわしい土地であることは間違いありません。

ではなぜ前橋でこのような「詩的にぎわい」が生まれたのでしょうか。何より影響したのは、言うまでもなく萩原朔太郎（1886～1942年）という日本近代詩史に刻まれる画期的な詩業を残した詩人の存在の大きさです。朔太郎が前橋に生まれ、生涯のほとんどを過ごし、活動が続けたことが、詩人たちに刺激を与え、集うきっかけとなり、詩のまちが形づくられるもとになりました。

上記のような文章を読むと、萩原朔太郎が抜け落ちた「上毛かるた」は、俗に言う画竜点睛を欠くということにならざるをえまい。泊まった高崎のホテルには、先にも名前が登場した前橋出身の詩人伊藤信吉の「写真で見る近代詩」と題した、没後20年を記念した写真展のチラシが置いてあった。伊藤は自身の詩作のかたわら、さまざまな詩人の原風景を訪ねて日本全国を旅した人として知られる。その写真を展示するという事なのであろう。たまたま私の本棚には彼の『詩のふるさと』（新潮社、1966年）と『詩をめぐる旅』（新潮社、1970年）があったので、この機会にと思って朔太郎が登場する箇所を拾い読みしてみた。そんな気儘な読書をしてはじめて知ったのだが、朔太郎の『氷島』（1934年）という詩集には「国定忠治の墓」と題した詩が収録されているとのこと。早速例の「青空文庫」で読んでみた。彼が前橋から程近い国定村に出掛けて詠んだ詩なので、せっかくだからここで紹介してみる。今読むと、表現がかなり古風で分かりにくいところもあるとは思いますが、寂寥と哀感と苦渋に満ちた作品である。

わがこの村に來りし時
上州の蠶（かいこ）すでに終りて
農家みな冬の闕（しきみ）を閉したり。
太陽は埃に暗く
悽而（せいじ）たる竹藪の影
人生の貧しき慘苦を感ずるなり。
見よ 此處に無用の石
路傍の笹の風に吹かれて
無頼の眠りたる墓は立てり。

ああ我れ故郷に低徊して
此所に思へることは寂しきかな。
久遠に輪を断絶するも
ああかの荒寥たる平野の中
日月我れを投げうつて去り
意志するものを亡び盡せり。
いかんぞ残生を新たにすも
冬の蕭條たる墓石の下に
汝はその認識をも無用とせむ。

この「上毛かるた」には「ねぎとこんにやく下仁田名産」という札がある。下仁田葱は太くて立派な姿形だが、近くのスーパーではごくたまにしか見掛けない。もう一つのこんにやくであるが、こちらはすぐに手に入る。先日近くのスーパーに行ったら、「下仁田のこんにやく」というそのものズバリの名前が付いた商品が置かれていた。製造元の所在地は甘楽郡下仁田町とあったので、何だか急に親しみを感じて買ってみた。ところで、何故こんにやくが下仁田で作られるようになったのであろうか。気温や水はけなどで好立地だったと解説されているが、それよりも、米を作るには不適だったというマイナスの要因の方がかなり大きかったようにも思われる。同じような事情は、蚕の餌となる桑の栽培にもあったのではなかろうか。

こんにやくと言えば、バスの車中で研究会担当の長尾さんが、木枯らし紋次郎がこんにやくを食べなかったという話を紹介してくれた。飢饉の際などに貧しい農村では広く間引きが行われたが、上州ではこんにやくを赤子の喉に詰めて間引きしたらしい。紋次郎も間引きされかけたが、姉の手によって救われるのである。そんな経緯があって、こんにやくを口にすることができなくなったという話だった。

私も中村敦夫主演の「木枯らし紋次郎」をテレビでよく見たが、その話はまったく覚えていなかった。笹沢佐保の原作には、こんにやくを喉に詰められそうになったとは書いてなかったが、彼が間引きされかけた話は「童歌を雨に流せ」に登場する（『木枯らし紋次郎（一）』（光文社時代小説文庫、1997年）に収録されている）。解説を書いている縄田一男は、笹沢が「史実との緊張関係をもって作品を書き継いでいる」と指摘していたが、そのことが木枯らし紋次郎という架空の人物に独特の存在感をもたらしていたのではあるまいか。上州ではこんにやく間引きが広がっていたのかもしれない。何とも悲惨な歴史の真実である。笹沢は先の作品で次のように書いている。

間引きは、子つぶし、子返しなどとも言われている。家族数を制限するために、生まれたばかりの赤ん坊を殺すのである。奈良時代あたりからすでに行なわれていたというが、江戸時代の初期には全国的に広まり、中期以後は半ば公然のこととされるようになった。特にこの天保の頃になると、農民の生活苦と度重なる飢饉により間引きは一種の習慣と化したのだ。中でも関東、東北地方の農村では、当然のこととして間引きが行なわれていた。

間引きされるのは四番目ぐらいに生まれた子どもが多く、それも女兒となると例外なく殺された。殺す方法としては、生まれた赤ん坊の首を締める、口の中に異物を押し込む、口と鼻に濡れた紙を貼りつける、土の中に埋めるといったことが普通のやり方だった。関東や東北では、この間引きと離村が多いために、人口が半分以下に減ったという農村も珍しくなかったのである。

「織都」桐生探訪記

調査旅行の二日目に、JRの両毛線に乗って「織都」（しょくと）とも称される桐生に出掛けた。この電車は、高崎から乗車して前橋、伊勢崎を通過し桐生に着く。ちなみに、両毛線の両毛とは上毛国と下毛国を指している。群馬の高崎と栃木の小山を結んでいるので、そう称することになったのだろう。もともとは主に生糸や絹織物を運ぶ鉄道だったようだ。桐生で見学したのは、桐生織物記念館、有鄰館、そして織物参考館“紫”の三つの施設であり、その間に桐生新町に残された重要伝統的建造物保存地区を、地元のボランティアの方の案内でのんびりと散策した。有鄰館の「鄰」の字も、今であれば「隣」と書くはずだが、旧字体の「鄰」となっていたし、織物参考館“紫”も「むらさき」ではなくあえて「ゆかり」と読ませていたが、そんなところにも歴史が感じられた。

ところで、桐生とはどんな街なのか。入手したパンフレットには、桐生は「日本遺産に出会えるまち」として紹介されていた。日本遺産とは、地域の歴史的な魅力や特色を通して日本の文化や伝統を語るストーリーを文化庁が認定するものであり、それぞれの遺産は、そのストーリーとそれを物語る文化財で構成されている。「かかあ天下ーぐんまの絹物語ー」は、日本遺産認定の初年度となる2015年度に認定されたのだという。この遺産は、群馬県内（桐生市、甘楽町、中之条町、片品村）にある13件の文化財からなり、古くから盛んであった上州の絹産業とそこにおける女性の活躍を伝える日本遺産である。桐生市には、その13件のうち6件の文化財があり、そのいずれもが絹織物の歴史と文化を伝える重要な役割を担っているとのこと。上毛かるたにも「桐生は日本の機（はた）どころ」と謳われるとおり、桐生は絹織物の町すなわち「織都」なのである。

われわれは、絹織物とは直接関係がない有鄰館を除いて、桐生にある6件の文化財のうちの3件を訪ねたことになる。せっかくだから、それぞれの文化財と有鄰館の印象を簡単に紹介してみよう。まずは桐生織物記念館である。外観からしていかにも風格を感じさせる歴史的建造物であるが、その印象は建物の中に入るとさらに強まる。私などは、陳列してある展示物よりも、その建物の醸し出すレトロスペクティブな雰囲気 strongly 惹かれてしまった。ホームページによると、この記念館は大要次のように紹介されている。

絹織物の産地としての桐生の繁栄は、1930年代半ばに最盛期を迎えることになる。桐生織物記念館は当時の桐生織物同業組合の事務所として1934年に建てられており、当時の桐生の繁栄を今に伝える歴史的な建造物である。1997年に国の登録有形文化財に指定され、その後日本遺産の構成施設として認定されている。建物は木造二階建ての瓦ぶきで、当時流行したスクラッチタイル（多数の細かい溝の模様があるタイルのこと）が張りめぐらされており、さらには、屋根に青緑色の洋瓦を用い、二階の旧大広間にはステンドグラスが入ったモダンな造りとなっている。2001年に現在の名称に改称され、桐生における産業観光の中核施設として生まれ変わったのだという。桐生の繁栄を象徴するその重厚な佇まいは、回りからも高く評価されているとのこと。私なども写真心をいたく刺激されたから、さもありませんと思われた。

次に有鄰館。こちらも歴史を感じさせる建造物である。ここは旧矢野蔵群とも呼ばれている。1717（享保2）年に近江商人の矢野久左衛門が桐生に来住し、二代目の久左衛門が1749（寛延2）年に現在の地に店舗を構えることになる。それ以来桐生の商業に大きく寄与してきた矢野商店の蔵群が、この有鄰館である。これらの蔵では酒・醤油・味噌などが醸造されており、もっとも古い蔵は1843（天保14）年に建てられたものだという。「有鄰」とは、『論語』にある「徳は孤ならず必ず鄰あり」（道義を行う者には、必ず理解者や援助者が集まるとの意）という教えを伝える言葉であり、かつての矢野商店の社是でもあったし、同社が製造していた醤油の商標でもあったとのことである。

敷地内には全部で11棟の蔵があり、ビール蔵を除いた建物が桐生市の指定重要文化財になっているとのこと。同一敷地内に煉瓦造や木造、土蔵造りなどのさまざまな建物が現存しており、桐生の町並み保存の拠点となっているようだ。なかでも、煉瓦で作られた蔵は市内でも有数の建物である。有鄰館として活用するために、ある程度の改修工事が行われているものの、南側入口に設けられたアーチ状の石組や、木造の和小屋組は当初のままとなっているとのこと。その他の蔵も、壁体が土・板・漆喰など異なる材料で作られており、太さや形状が異なる柱などが独特の景観を生み出している。現在では、コンサートや舞台、ギャラリーなどに活用されているのだという。私はここでも大いに写真心をくすぐられた。そしてまた、こうした建物を大事に保存している桐生という町に、親しみを感じ好感を抱いた。

上記の二つの施設と比べると、織物参考館“紫”の印象はいささか薄い。桐生織物記念館を訪ね、桐生新町にある重要伝統的建造物保存地区を散策し、昼食に桐生のご当地メニューだというひもかわ（帯のように平らなうどんである）とソースカツ丼をはじめ食べて食べ、食後に有鄰館を眺め、その後に出掛けた場所だったので、いささか頭が飽和状態だった所為もあったかもしれない。あるいはまた、こちらが絹織物業で働いていた人間の方に興味があり、その実態を知りたいなどと思っていたこととも無関係ではなかろう。織物参考館“紫”は、ノコギリ屋根の工場を活用した体験型の博物館であり、陳列された古い織機を眺めながら織物の歴史を辿ることになった。ここでは手織り体験や染物体験もできるのだという。

せつかくだから、桐生新町の重要伝統的建造物保存地区についても一言触れておこう。案内してくれたボランティアの方は、まず最初に保存地区の外れにある天満宮で、その由緒と意匠に関して懇切丁寧に解説してくれた。桐生という町の起点として鎮座しているからなのであろう。だが、私はほとんど上の空で聞いていた。そうした話にあまり興味や関心がないからである。できることなら早く町巡りをしたかった。そんなふうに感ずるのは、年を取ってすっかり我が儘になった所為であろう。この保存地区は、1591（天正19）年に徳川家康の命を受け、代官大久保長安の手代大野八右衛門により新たに町立てされており、それ以来在郷町として発展してきたのだという。在郷町とは、農村地域にありながら実質は町として活動しているものを言うようだ。

町が造られた当初は、農閑期の余業として絹織物の生産が行われていたらしい。江戸中期になると「高機」（たかはた、手織機の一種で居座り機よりも腰の位置が高くなる）という技法によって生産された製品「飛紗綾」（とびざや、地が厚くとびとびに花紋のある織物）が江戸や京都などからも注文を受けるようになり、桐生は西陣に脅威を与えるほどの産地へと成長する（当時「西の西陣、東の桐生」とまで呼ばれたらしい）。桐生新町は絹織物の生産の場である一方で、買継商（産地にいて都市の間屋の注文を受け、仲買商が集荷した商品を転売した商人のこと）等が店を構えたりもしたので、流通の場という一面もあわせ持っていた。その結果、そこに暮らす人々や集まる人々の飲食や日用品などを扱う店舗も集積することとなり、町として発展を遂げていくのである。

ここには、江戸の後期から昭和の初期に建てられた主屋や土蔵、ノコギリ屋根の工場など、絹織物業に係わるさまざまな建造物が残されている。地区内には約400棟の建物があり、そのうちの6割が昭和の初期までに建てられたものだという。「織都」としての桐生を代表する象徴的な地区となっており、訪れた人は特色ある歴史的な景観を目にすることができる。こうした場所をのんびりと歩いていると、昔父や母と暮らしていた福島市の五月町界隈の風景が何とも懐かしく思い出され、往時にタイムスリップしたかのような気分だった。

「機音、製糸の煙、桑の海」

こんなふうに印象記を書き連ねてきてあらためて感じたことであるが、桐生は歴史の面影を色濃く残した町である。しかしながら、その面影は典雅な風情といったものとは違っている。残されているのは近代史の面影だからである。自分自身の育ってきた歴史と通底するものも感じられるので、尚更懐かしく思われるのであろう。できることなら途中でお茶でも飲みながら一休みしたり、夜にふらりと居酒屋にでも出掛けてみたかった。そんな面影のある町なのだから、写真集ぐらいは置いてあるだろうと思ったが、どこの売店にもなかった。調査旅行から戻ってネットでも検索してみたが、私が期待したものを見付けることはできなかった。桐生の面影は、記憶のなかにひっそりと残しておくしかなさそう。

桐生駅に降り立ってから再び桐生駅に戻るまでの移動手段は、MAYU と命名された小さな低速電動バスであった。はじめて乗る乗り物である。絹織物の町桐生だから MAYU という愛称となったのであろう。この乗り物はグリーンスローモビリティと総称されているようで、現在各地で導入の実験が積み重ねられているらしい。その現状と今後の可能性については、同名の『グリーンスローモビリティ』（学芸出版社、2021年）に詳しい。たんなる移動手段ではなく、「地域活性化のための社会装置」だということのようなのだが、乗車させてもらっているうちにそうかもしれないという気がしてきた。桐生のような古い町に MAYU はよく似合っていた。もはやあくせく動き回る必要もなくなった私のような年寄りにとっては、なおのこと丁度いい乗り物である。天候に恵まれたこともあって、心地よい風が吹き抜けるバスはじつに爽快だった。

ところで、「織都」と呼ばれる桐生は絹織物の町であるが、この絹織物は、蚕から始まって繭にいたり、繭からひかれた生糸をもとにしてできあがるので、絹を巡る物語の最後の産物ということになる。そこで、最後の産物に至るまでの流れをもう少し具体的に紹介してみよう。大きく分ければ、その流れは養蚕、製糸、織物に区分される。養蚕とは、蚕を育てて生糸のもとになる繭をつくることをいう。蚕は繊細で飼育が難しい虫、つまり世話のやける虫でもあったし、また現金収入をもたらす大切な虫でもあったので、「お蚕（こ）さま」と呼ばれて家の中で大事に育てられたという。家人もそんな呼び方を聞いたことがあると言っていた。蚕の餌となるのは桑の葉である。成長期にはかなりの量を食べるらしい。

次の製糸とは、蚕がつくった繭から糸をひいて生糸をつくることをいう。小さな白い芋虫のような蚕は、桑の葉を食べて成長すると糸を分泌して繭をつくり、その中でさなぎに変態する。蚕がつくったこの繭を養蚕農家から買い集め、そこから絹織物の原材料となる生糸をとるのである。繭から糸をとることをひくと言っているが、そのひき方にはいろいろあって、昔は座って手作業で糸をひく座繰り製糸だったが、その後明治に入って富岡製糸場に代表されるような

器械製糸へと発展していく。座繰り製糸の場合は、糸枠を手で回転させながら糸をひくのであるが、器械製糸になると、多数の糸枠を取り付けた長い軸を機械で回転させ、工女を糸枠の回転作業から解放して、糸をひくことに専念させることができるようになった。

最後が織物であるが、できあがった生糸を精練したり染色して織物に仕上げることをいう。生糸のままでは滑らかでもないし光沢もないので、織物にする前か後に漂白するのだという。絹織物は糸質や糸の撚（よ）りや産地の事情などによって、しわや光沢や地薄（じうす、生地が薄いこと）の違いが生まれ、多様な織物が生まれるとのこと。先にもふれたように、桐生は古くから高級な絹織物の産地として知られていた。そして、機織り女と呼ばれた女性たちが近隣の村から集まってきたのだという。

このように、絹織物ができあがるには養蚕、製糸、織物の流れが必要となるが、群馬はそのいずれにおいても全国一の地位を占めてきた。そのことをよく示しているのが、『不如帰（ほととぎす）』で知られる（とは言っても、私は読んでいない。「謀叛論」だけは読んだが…）徳富蘆花が綴った明治期の群馬の印象であろう。「機の音、製糸の煙、桑の海」がそれである。五七五調になっているので何だか無季の俳句のようでもある。先の養蚕、製糸、織物を逆に並べている。製糸の煙とは、繭から糸をひく際に繭を熱湯に入れて作業するので、その蒸気がノギリ屋根の工場から湯煙となって立ち上っていたのであろう。どこか気になるこの美しい表現が、手にしたパンフレットに何度か出てきたので、その出典を調べて読んでみたくなった。相変わらずの物好きである。調べてみると、1900年に出版された『自然と人生』の中にある「上州の山」と題する文章の、書き出しだという。早速例の青空文庫で読もうとしたが、収録されていなかった。手元にある筑摩の文学全集にもない。仕方がないので、ネットの記事から紹介させてもらおうかと思っていたら、『自然と人生』が岩波文庫となって出版されていることがわかった。きわめて短いエッセーなので、全文をそのまま紹介しておく。

機の音、製糸（せいし）の煙、桑の海、其上（そのうえ）に聳（そび）ふる赤城榛名妙義碓氷、遠くて浅間甲斐秩父の連山、日光足尾の連山、越後境の連山、或は奇蛸（きしょう）、或は雄偉、根は地に、頭（かしら）は天に、堂々として立って居る。果てしない桑原のみちにあき果て、其となく眼を上げると、此等の山々が常に泰然として頭を擡（もた）げて居る。日常生活の齷齪（あくせく）立ち雑（ま）じって、しかも心は挺然無窮の天に向かふ偉大の人物は、実に斯くの如くあるであらふ。自分は上州に行く毎に、山が斯く囁（ささや）く様に覚ふるのである。

なかなか味わいのある文章なので、岩波文庫に収録されたのであろうか。蘆花は群馬を愛し

た人物のようで、ベストセラーとなった先の『不如帰』は伊香保温泉を舞台としていた。それ以来、この温泉が世に知られるようになったのだという。また、伊香保温泉を愛した彼がそこで亡くなったこともあって、渋川には徳富蘆花記念文学館が建てられている。今回の調査旅行が切っ掛けとなって、国定忠治にも関心を持ち、暇にまかせて高橋敏著の『国定忠治』（岩波新書、2000年）まで読んでみたのだが、忠治繋がりでも菊池寛の「入れ札」を再読してみた。この小説は以下のような文章から始まる。

上州岩鼻の代官を斬きり殺した国定忠次一家の者は、赤城山へ立て籠って、八州の捕方を避けていたが、其処も防ぎきれなくなると、忠次を初、十四五人の乾児（こぶん）は、辛く一方の血路を、斫り開いて、信州路へ落ちて行った。夜中に利根川を渡った。渋川の橋は、捕方が固めていたので、一里ばかり下流を渡った。水勢が烈しいため、兩岸に綱を引いて渡ったが、それでも乾児の一人は、つい手を離したため流されてしまった。

渋川から、伊香保街道に添うて、道もない裏山を、榛名にかかった。一日、一晩で、やっと榛名を越えた。が、榛名を越えてしまうと、直ぐ其処に大戸（おおど）の御番所があった。信州へ出るには、この御番所が、第一の難関であった。此の関所をさえ越してしまえば、向うは信濃境まで、山又山が続いている丈であった。忠次達が、関所へかかったのは、夜の引き明けだった。わずか、五六人しか居ない役人達は、忠次達の勢に怖れたものか、彼等の通行を一言も咎めなかった。関所を過ぎると、さすがに皆は、ほっと安心した。本街道を避けて、裏山へかかって来るに連れて、夜がしらじらと明けて来た。丁度上州一円に、春蚕（はるご）が孵化（かえ）ろうとする春の終の頃であった。山上から見下すと、街道に添うた村々には、青い桑畑が、朝靄の裡に、何処どこまでも続いていた。

徳富蘆花の「機の音、製糸の煙、桑の海」を紹介したパンフレットには、そこには群馬の原風景があると書かれていたが、当時は確かにそうした世界が広がっていたのであろう。そしてまた、菊池寛の描いた情景は、何やら上州の原風景のような気がするのである。さらに言えば、「桑の海」や「青い桑畑」に着目すると、それは群馬だけにとどまらず日本の原風景へと広がって行くのではなかろうか。1929年には、農家戸数に占める養蚕戸数の割合は4割にも達していたからである（滝沢秀樹『繭と生糸の近代史』教育社、1979年）。桑の実を口にした記憶は定かではないが、田舎の福島にも桑畑はごく身近にあった。童謡の「赤とんぼ」にも、「山の畑の桑の実を 小籠に摘んだは まぼろしか」とあるぐらいだから、全国各地に桑畑は広がっていたのであろう。

こんなことを取り留めもなく書いているうちに、昔うたごえ運動で歌われていた「桑ばたけ」

(作詞・門倉訣、作曲・関忠亮) という歌を思い出した。1950年代半ばに闘われた砂川基地拡張反対闘争から生まれた歌である。うたごえ運動に参加したわけではないが、学生運動に飛び込んだ私も、学生の頃にこの歌を聞いた記憶がある。砂川闘争では、警官隊と対峙した学生や農民が、「赤とんぼ」を歌ったという話も聞いた。昔を思い出して懐かしくなったので、4番までである歌詞を紹介しておく。You Tube では若くして亡くなった渡辺定市が情感込めて朗々と歌い上げている。

桑ばたけの しげる葉は
亡き母の 背におわれ 苗植えた 昔から
とぶ鳥さえ なじんでたが

桑ばたけは 今荒れて
爆音は ワラ屋根に さける程 たたきつけ
桑ばたけは 吹きさらし

桑ばたけは 握りこぶし
振り上げて ならび起ち 畑守る この私と
芽ぐむ春を もとめうたう

春になったら 枝を刈り
かおる葉を カゴにつもう むく鳥よ 高く舞い
このよろこび 告げてくれ

碓氷製糸を見学して

調査旅行の最終日には、群馬県内でたった一つの製糸工場となってしまった碓氷製糸を訪問し、その後横川駅にほど近いレストランで、世間によく知られた例の釜飯を食べた。信越線がまだ横川駅と軽井沢駅とを結んでいたころ、横川駅で何度か峠の釜めしと四角いプラスチックケースに入れられたお茶を買った記憶がある。しかしながら、その時の旅がどんな旅だったのか、今となってはまったく思い出せない。おそらく、軽井沢か長野か飯山あたりに出掛けた時だろうと思われるのだが…。

この信越線は、もともとは高崎から長野、直江津を経て新潟に至る路線であったが、1997年

10月に高崎駅と長野駅間の北陸新幹線が先行して開業されたのにもない、碓氷峠を越える横川駅と軽井沢駅の間が廃止され、その間はバス路線に転換されたのである。そうすると、高崎駅から信越線に乗れば横川駅が終着駅となるわけで、わざわざ駅の構内で釜飯を買う必要もなくなる。ひところの旅情を誘う風物詩も、こうして消え去ってしまったわけである。しかしながら、レストランに出向けば今でも釜飯は食べられる。容器も中身も昔と同じようだが、昔よりももっと豪華で旨くなっているような気もした。だが、レストランで食べる釜飯に旅情は感じられなかった。それもやむを得まい。併設された売店で峠の力餅を買った。昔中山道を歩いて旅した人々が、峠の茶屋で食べたことに由来しているのであろう。素朴だが懐かしい味だった。

食べ物の話題はこれぐらいにして、午前中に訪問した碓氷製糸の話に戻ろう。今回の調査旅行では、高崎経済大学に勤務しておられた大島登志彦さんに大変お世話になった。調査に同行して丁寧に説明してもらっただけではなく、バスの車中でも有益な情報をたくさん提供していただいた。そしてまた、彼から資料や論文の抜き刷りなどももらった。そのなかに、「近年の日本国内の蚕糸業の動向と製糸工場の現状」(『高崎経済大学論集』第56巻第4号)と題された論文があった。そこには、碓氷製糸の話が登場しており、以下のように紹介されている。

平成25年現在、県内で稼働している製糸工場は、碓氷製糸農業協同組合1社となっている。同工場は、元々は会社組織だったが、それが廃業して、松井田町内の農家を中心に出资方式、昭和34年に創立した組合製糸工場である。組合製糸は、かつて全国に多数所在し、製糸工場の主要形態の一つで、群馬県西部では、甘楽社、碓氷社、下仁田社などが著名だった。

工場には日産自動車製自動繰糸機が並ぶが、(中略)群馬県産のブランド繭8品種を含む十数種類の繭から、碓氷の太糸、座繰り生糸など6種類の方法で、付加価値の高いブランド生糸の生産に取り組み、全国に販売している。蜂の巣倉庫(筒状の繭の貯蔵庫を蜂の巣状に組んだ繭倉庫の総称—引用者注)も2棟あるので、繭の入荷には力を入れていたことが伺える。会社の外観も、建物面積が延9,756㎡というが、妙義山をバックに、手前からかつての女子寮や工場、荷受所と2棟の倉庫等が効率的に配置され、昔の製糸工場の面影をとどめている。

従業員は33名、繭の出荷者は480戸(群馬県314戸・県外166戸)で、年間で収納繭165,000kgから36,000kgの生糸を、通年生産している。また、組合員は377人、出資金は4,191万円である(設備や人数等は平成23年4月現在)。富岡製糸場に近いこともあって、近年脚光を浴びて見学者が増えているが、絹織物や靴下や下着、スカーフなどの日用する絹製品を独自に開発して、併設した売店で展示・販売している。

大島さんはこんなふうに書いているのであるが、この論文は2014年のものであり、使われているのは2011年のデータなので、その後現在までにいくつかの大きな変化が生じている。訪れた際に受け取ったパンフレットによれば、社名の碓氷製糸農業協同組合は2017年に碓氷製糸株式会社に変わっていたし（おそらく、組合員の減少が影響しているのであろう）、従業員数も33名から23名に減少していた。その背景にあるのは、生糸の生産量が36トンから13.6トンへと落ち込んだことであろう。それにともなって、繭の収納量も165トンから71.5トンへと減少している（現在の会社のホームページによると、従業員数20名、生糸の生産量6.2トン、繭の収納量48.8トンと、さらに減少している）。工場を案内してくれた方の口振りからも、経営の苦境が今も続いていることが窺われた。

碓氷製糸が群馬に残された唯一の製糸工場だというのだから、「機（はた）の音、製糸の煙、桑の海」とまで評された世界はほぼ消滅したということなのだろう。碓氷製糸は妙義山の麓に近い安中市松井田町にある。妙義山は奇岩・怪石・絶壁に富んでおり、一度見たら忘れられない山容である。近くには碓氷川も流れている。これらの山や川は100年前とほとんど変わらぬ姿であるが、絹の世界はその間急速な衰退に見舞われ、依然として低迷が続いている。そんなわけで、今回の工場見学にはある種の侘しさも纏わり付いていた。碓氷製糸で受け取ったリーフレットには、「日本に残り少ない製糸工場として、純国産製糸にこだわり続け、全国各地で生産された繭を生糸に加工し、全国に出荷」しているとあった。往年の製糸業の面影を今に伝えるモデル工場のようにもあり、工場見学者もそれなりにいるのであろう。リーフレットには見学ルートも図入りで描かれていたし、工場関係者のガイドの方の説明も、的確で手慣れたものだった。私などは、ここに来て初めて製糸業の全貌を理解することができた。

製糸の生産工程は次のようになる。案内順に紹介してみる。まずは繭の荷受けである。養蚕農家が生産した繭は、荷受け場に搬入され、そこで品質が評価される。そのうえで重量を確定し、次に繭の乾燥へと移る。出荷された繭は生きているので、蛾やカビの発生を防いで長期の保存が可能なように熱風で5～6時間乾燥する。こうして蛹を殺してから、繰り糸に適さない汚れた繭などが目視で選別される。外見だけでは内部の汚染は分からないので、この作業は、下から光線をあてたベルトコンベアの上で行われるのだという。

上記のような作業を行ってから煮繭（しゃけん）に移る。繭を湯や蒸気などで20分ほど煮て柔らかくし、繭糸がほぐれやすくなるように処理するのである。そのうえでようやく繰り糸となる。この作業は製糸工場の中心工程である。煮繭した繭から糸口を出して目的とする太さの生糸を引き出し、巻き取っていく。見学した私などには、繭から糸が引き出されていく過程がとても興味深く、人と器械の動きに見とれてしまった。富岡製糸場もこんなだったのかと勝手に想像した。写真で見ると、富岡製糸場では多数の工女がずらりと並んでいたが、碓氷製糸

では自動繰糸機を使っているために、縦長の作業場に人はまばらだった。

次に巻き返しの作業がある。繰糸した生糸は小枠に固く巻かれているので、機屋（はたや）が取り扱いやすいように、外周が 150 cm の大枠に巻き返す必要がある。この作業は揚げ返しと呼ばれている。生糸の最初と最後が分かるように緒止めしたうえで、生糸の形が崩れないようにあみそ糸を掛けるのである。この状態の生糸を 20～24 束に纏めたものは括（かつ）と呼ばれ、6 括ごとに段ボールに詰められ出荷となる。

こんな時期にも拘わらず、現場を丁寧に案内してもらって嬉しかった。工場内を移動しているうちに、そこに漂っている臭いから、昔の記憶が蘇った。私が育った福島市の五月町にも当時小さな製糸工場があり、その臭いと同じ臭いだったことを思い出したからである。この工場の親父さんが、俗に言うカミナリ親父でたいへんに怖い人だった。子供たちが工場の裏手で遊んでいたりとすると、よくすごい剣幕で雷を落としていた。もしかしたら、危険だと思っていたからなのかもしれない。きっと理由があったのであろう。今「臭い」と書いたが、記憶の中の懐かしい臭いだったので、もはや「匂い」と書きたくなるような思いであった。たんなる感傷に過ぎないのではあろうが…。

碓氷峠にて

最終日の午前中に碓氷製糸を見学したわれわれ一行は、昼に峠の釜飯を食べた後、横川駅のすぐ隣りに併設された「碓氷峠鉄道文化むら」に向かった。この施設は、横川駅のある安中市によって 1999 年に建てられたものである。先にも触れたように、信越線は 1997 年に群馬県の横川と長野県の軽井沢の間が廃線となった。ところで、この横川と軽井沢の間に鉄道が敷設されたのは随分昔の話で、1891 年に着工して 93 年に完成している。近代化を急ぐ明治政府は、1889 年に全線開通した東海道線に加えて、日本の東西を繋ぐもう一本の路線として、中山道を通る鉄道を計画したのだという。

しかしながら、横川と軽井沢の間には標高 956 メートルにも達する碓氷峠が横たわっており、この勾配のきつい峠を越えるためには特別な方式の鉄道を敷設する必要があった。そのために採用されたのがアプト式鉄道である。このアプト式鉄道とは、スイス人のロマン・アプトという人物が発明した山岳鉄道のことである。蒸気機関車は平坦な地を走るには適しているのだが、急な坂を上り下りするのは苦手なのだという。そこでアプトは、機関車の動輪の内側に歯車をつけ、線路の真ん中に敷設された山形の歯を付けたレールと噛み合わせて、急勾配の地でも上れるようにしたのである。「碓氷峠鉄道文化むら」に入るとすぐに、この山形の歯が付いたレールを見ることができる。

このアプト式鉄道に加えて、碓氷峠には数多くのトンネルや橋梁も建設された。26 箇所のトンネルと 18 箇所のアーチ橋である。山や谷が多い難所だったからであろう。長野県民にはよく知られた県歌「信濃の国」にも、「穿つ隧道二十六 夢にもこゆる汽車の道」とある（この県歌は、先に触れた「上毛かるた」にも似ており、そこには「しかのみならず桑とりて 蚕（こ）飼いの業（わざ）の打ちひらけ」といった歌詞もある）。そのなかでもっとも有名なのは、「めがね橋」と呼ばれている碓氷第三橋梁なのではあるまいか。四連からなるレンガ造りのアーチ型をした堂々たる橋である。関連する著作や写真集には必ずと言っていいほど登場する橋なので、目にした方も多はずである。私としては今回この橋も是非ともこの目で見たかったのだが、スケジュールの関係で叶わなかった。

ところで、今紹介してきたような話は、ものの本にはよく紹介されているような事柄であり、書いている私も何を今更という気がしなくもない。私は鉄道マニアではないので、展示されていた機関車の重量感溢れる勇姿を見ても、特段の感慨を催すことはなかったが、ファンであれば大いに感激するに違いない。私はといえば、子供っぽい意匠が散見されたこの施設よりも、終着駅となった横川駅の方に興味が沸いた。川の源流と河口が気になるように、鉄道の始発駅と終着駅が気になっていたからである。始発駅は何処も大きな駅舎なので、ほとんど何も感ずることはないが、終着駅となるとそうはいかない。鉄道の終わりは、旅路の果てのようにも思われるからであろう。周りはフェンスで囲われていたので、中までは入れなかったが、早春の季節の中で眺めた鉄道の終わりは、人影もまばらで物音さえしない静かな場所だった。売店を覗いて石井尚頭という方の『碓氷峠』（光村印刷、1997 年）と題した写真集を購入した。四季の風景の中に捉えられた信越線の列車の写真集だが、今は峠の鉄路が廃線となったが故に、そこには懐かしさが溢れていた。

ところで、アプト式の鉄道でようやく超えた碓氷峠であるが、この峠は、群馬県と長野県の県境にあって、信濃川水系と利根川水系とを分ける中央分水嶺なのだという。峠の長野県側に降った雨は日本海へ、群馬県側に降った雨は太平洋へと流れていく。話のついでになるが、碓氷峠の碓氷という表記が気になった。何故「氷」なのかが不思議だったからである。調べてみたら、碓氷峠は万葉集にも登場しており、由来はかなり古い。これまでさまざまに表記されてきたようだが、近世以降は碓氷で統一されたとのこと。「氷」は「ひ」と読むが、それが「い」に転じたのであろうか。そう言えば、初日に立ち寄った「こんにやくパーク」は甘楽（かんら）町にあるが、この甘楽なども珍しい表記だからきっと由来があるに違いないだろう。

ついでのついでになるが、万葉集に登場するこの峠の歌は次の二首。詠んでいるのはともに上野国の人間だが、その歌碑は軽井沢にあるようだ。歌番号 3402 の相聞歌「日の暮れに 碓氷（うすひ）の山を 越ゆる日は 夫（せ）なのが袖も さやに振らしつ」（碓氷峠を越える日は、

夫が袖をはっきりと振ってくれた)。もう一つは歌番号 4407 の防人歌「ひなぐもり 碓氷(うすひ)の坂を 越えしだに 妹(いも)が恋しく 忘れぬかも」(ひなぐもりの碓氷の坂を越えるときに、妻が恋しくて忘れられない)である。ともに情感溢れる歌である。峠というものが、別れをより切なくさせているのであろう。峠の近くに佇んだ私も、上州の空と雲と山を眺めているうちに、いささか感傷的な気分になった。

ここが今回の調査旅行の最後の訪問地なので、見学が終われば後は高崎に戻り帰路に就くだけである。この碓氷峠の鉄道施設は「近代化遺産」や「産業遺産」や「鉄道遺産」として著名であり、そうした類のさまざまな著作には、写真付きで必ずと言っていいほど登場している。そうしてみると、今回の調査旅行では、「世界遺産」に登録された富岡製糸場を訪ね、桐生で「日本遺産」に出逢い、碓氷峠の鉄道文化村では「鉄道遺産」を眺めたことになる。

「世界遺産」として登録された富岡製糸場に関しては、後にあれこれと触れるつもりではあるが、遺産ということ言えば、近頃は世の中どうも遺産ばやりのようなのである。最近では、岸田内閣が、佐渡の金山の「世界遺産」への登録をユネスコに申請したことが、マスコミでも大きく取り上げられていた。金山では、戦時中に朝鮮人の強制労働が行われていたことが分かっており、その事実をも含めての申請でなければならないはずであった。だが一部には、「日本の名誉と誇り」を守る「歴史戦」だなどと称して、強制労働の事実を全否定するような暴論や愚論も横行しているようである。そうした身勝手な歴史解釈が、今日の世界に通用するはずもない。

2015 年の長崎の軍艦島(を含む「明治日本の産業革命遺産」)の「世界遺産」への登録の際も、日本の徴用政策や朝鮮人の強制労働の事実を理解できるようにして、「犠牲者を記憶にとどめる措置」をとらなければならないはずだったが、日本政府はこれまでのところほとんど何も実行していない。そのため、2021 年のユネスコ世界遺産委員会から遺憾の意を表されてきているのである。こうした状態では、日本に佐渡金山の「世界遺産」への登録を申請する資格など、ありようはずもないのだが…。

それはともかくとして、遺産ばやりだなどと書いたのは、「世界遺産」とともに「近代化遺産」や「産業遺産」、「産業革命遺産」、「鉄道遺産」、「土木遺産」、「文化遺産」、「戦争遺産(遺蹟)」、「宗教遺産」そして「日本遺産」などが、しばらく前から相次いで登場してきており、何とも紛らわしい状況が生まれているからである。最近知ったのだが、「都市遺産」や「建築遺産」や「歴史遺産」といった言葉もあるようだ。私などはさまざまな遺産の定義をほとんど理解することもなく、著作で紹介されるままにその名を使ってきている。きちんと定義もしないで、多くの遺産を紹介している方も変だと言えば変なのだが、遺産と名付けられさえすれば、「凄いもの」、「大事なもの」、「立派なもの」としてつつい有り難がるような、こちら側の心性も、も

しかしたら大いに問題なのではあるまいか。

他者の評価をむやみに有り難がるのは、自分自身に自信が持てないからなのであろう。いわゆるブランド志向などにも似たような雰囲気を感じず。そう言えば、わが国には「日本百〇〇」とか「△△十選」とか「三大××」といったランキングや、「□□コンテスト」なども、実に数多くある。著名なのは深田久弥の「日本百名山」だが、遺産ばやりの背景を突き詰めていくと、比較して評価したり序列付けなければ落ち着かない、日本社会の病弊にまで辿り着くような気がしないでもない。大事なことは、世の中を見る自分の眼を鍛えあげることであろう。これは、何時も我が身に言い聞かせている座右の銘でもあるのだが…。

遺産あれこれ

日頃狷介な生き方をしている私は、遺産と聞いただけで有り難がったりはしないが、さまざまな遺産の定義とその異同の概略ぐらいは知りたいと思う。誰が、いつから、どのような内容の遺産を、どのように評価して、誰に相続しようとしているのか、それが問題だからである。そんなわけで、暇に任せて関連の著作を探して何冊か購入してみた。遺産がタイトルに入った著作や写真集は文字通り山なすようにあるので、どれを購入すればいいのか選択に迷うほどである。

迷った末に手にした著作だが、そのほとんどは遺産に関する総論などはほどほどにして、すぐに各地に点在する遺産の紹介に入っている。伊藤孝の『日本の近代化遺産』（岩波新書、2000年）にしてもそうである。他に手にしたのは、増田彰久『近代化遺産を歩く』（中公新書、2001年）、増田彰久・清水慶一『ニッポン近代化遺産の旅』（朝日新聞社、2002年）、北河大次郎・後藤治『日本の近代化遺産』（河出書房新社、2007年）、二村悟『ニッポン産業遺産の旅』（平凡社、2015年）、「旅人鉄道」編集部『鉄道遺産をめぐる』（山と溪谷社、2020年）などである。そのなかでは、増田彰久（写真）・清水慶一（文）の『ニッポン近代化遺産の旅』だけが、写真も文もともに見応え読み応えがあり、気に入ったのではあるが…。だが、多くの著作は似たような内容で、私が期待していた肝腎のものが見当たらない。どうも遺産を巡る旅が本のセールスポイントとされており、何となくガイドブックのような趣が漂っているのである。「百聞は一見に如かず」も間違っていない。私もまた今回の調査旅行に同伴させてもらって一見した結果、あれこれ考えることになったのだから、見ることに確かに意味はある。しかしながらそれと同時に、「百見は一読に如かず」ということだってあるかもしれない。ふとそんな思いも抱いた。

相変わらずの無駄話はともかくとして、今回の調査旅行は遺産を巡る旅だったので、自分自

身の頭の整理のためにも、さまざまな遺産の様相を知り得た範囲で紹介しておきたい。まずは世界遺産（World Heritage）である。1972年のユネスコ総会で、「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約」（世界遺産条約）が採択されたのであるが、その条約にもとづいて、世界遺産リストに登録された文化財、景観、自然などの人類が共有すべき「顕著な普遍的価値」を有するものを、世界遺産と呼んでいる。移動が不可能な不動産が対象となっている。慣習的な呼び方として、世界遺産の中の文化遺産を世界文化遺産、自然遺産を世界自然遺産と呼んでいるとのことである。現在日本には25件の世界遺産が登録されており、そのうち20件が世界文化遺産、5件が世界自然遺産である。ここで大事なことは、人類が共有すべき「顕著な普遍的価値」を有するものが世界遺産なのだということだろう。人を呼び込むための観光資源などではないのは勿論のこと、国威を発揚するための道具などでもない。世界遺産の登録数を誇ったりするような姿勢などは、論外と言うべきであろうか。

次に「近代化遺産」である。今回の調査旅行では、「近代化遺産を通して学ぶ社会変化」がテーマとして掲げられていたのだから、我々にとってはもっとも重要な遺産だということになる。近代化遺産とは、明治以降の日本の近代化を支えた総体を、広く文化遺産として捉えようとする概念であり、製鉄所、造船所、製糸場などの工場設備や、機械、鉱山、橋、ダム、トンネル、発電所、鉄道などの建造物、さらには河川施設や港湾施設などを指している。先のような遺産は、これまでは文化財の保護制度の対象とらしくなかったようだが、それらを文化遺産として評価しようとする動きが強まっていくなかで、「近代化遺産」というカテゴリーが生まれたということである。

文化庁の支援によって、1990年から「近代化遺産」の調査が始められるのだが、この調査は特に優れた「近代化遺産」を重要文化財に指定し、保護することを目的としたものであった。そうした動きを踏まえて、93年には重要文化財のなかの建造物の種別として「近代化遺産」が新設されたのだという。先に触れた碓氷峠の鉄道施設と秋田県の藤倉水源地の水道施設が、該当する重要文化財として初めて「近代化遺産」の指定を受けたとのことである。その後、96年には文化財保護法が改正されて、従来の指定文化財の制度に加えて保護の対象を広げた登録文化財の制度が導入され、保護が本格化したのだという。

それでは「産業遺産」はどうか。「産業遺産」という用語は英語の Industrial Heritage を翻訳したもので、イギリスで成立した産業考古学の研究対象の明確化のために用いられるようになったとのことである。日本では、明治以降の産業遺産のなかでも優れたものは、上述したように、文化庁によって「近代化遺産」として重要文化財の指定を受けているので、「産業遺産」と「近代化遺産」は重なり合ってもいる。しかしながら、経済産業省は文化庁の「近代化遺産」とは別に「近代化産業遺産」を認定している。この辺りがいささか（いや、かなりか）紛らわ

しい。経済産業省によれば、明治から戦前にかけての工場跡や炭鉱跡等の建造物、画期的製造品、製造品の製造に用いられた機器や教育マニュアル等は、日本の近代化に貢献した産業遺産としての価値を持っている。しかしこれらの産業遺産は、よほどのもの以外はその価値が理解されにくく、一昔前のものとして廃棄されてしまうことも多いという。そこで同省は、産業遺産を地域活性化のために有効に活用するという視点から、2007年に産業遺産活用委員会を設置して各地に現存している産業遺産の公募に乗り出すのである。同委員会は、各地の産業遺産の実態と保全の状況を調査したうえで、現在575件の遺産を「近代化産業遺産」として認定している。かなりの数である。こうした試みで地域が活性化するものかどうか、いささかの疑問が生ずるのではあるが…。

地域の活性化と言えば、文化庁までもがそうしたところに関心を示している。地域の歴史的魅力や特色を通じてわが国の文化や伝統を語るストーリーを「日本遺産」(Japan Heritage)として認定し、そのストーリーを語るうえで欠かせない文化財群を活用する取り組みについても支援しているからである。同庁によれば、文化財や伝統文化を通じて地域の活性化を図るためには、その歴史的経緯や、地域の風土に根ざした伝承や風習などを踏まえることが必要だからだという。世界遺産への登録や文化財としての指定は、いずれもその価値を評価して保護することを目的としている。しかしながら、「日本遺産」としての指定は、そうしたことを目的としたものではなく、地域に点在する遺産を「面」として活用し発信することで、地域の活性化を図ることを目的としている点に違いがあるのだという。地域の活性化ということで、地元の誉れや輝かしい歴史を称揚するだけであっては、先の「近代化産業遺産」と同様に、これを遺産と呼ぶべきかどうか異論のあるところであろう。

富岡製糸場は、「世界遺産」でもあり、「近代化遺産」でもあり、「近代化産業遺産」でもある。そしてまた「日本遺産」にも含まれている。碓氷峠の鉄道施設は、「近代化遺産」でもあり、「近代化産業遺産」でもあり、そしてまた当然ながら「鉄道遺産」でもある。では、この場合の「鉄道遺産」とは一体何だろうか。日本の近代化に寄与した鉄道は文化財としての価値を有しており、これを鉄道遺産と称しているわけだが、こうした呼称はあくまでも俗称であろう。わざわざ「鉄道遺産」などと称しているのは、「近代化遺産」や「近代化産業遺産」に認定されていないものまで含めて、分野別に区分しようとしているからなのであろうか。どこかに遺産ブームにあやかろうとの匂いも感じなくはないのだが…。「土木遺産」や「都市遺産」や「宗教遺産」などといったものも、似たような用法なのではあるまいか。こうして日本は、いつの間にか遺産だらけの国になってしまった。未来が見えないが故に、過去を振り返っているような気がしないでもない。

戦後の日本が成長最優先の土木国家となり、旧き佳きものを壊し続けてきたことは誰しもが

認めるところだろう。だが、そうした有り様に深い反省を加えることもなく、今度は一転して遺産ブームである。この振幅の大きさが、日本を文化国家として成熟するのを妨げている元凶なのかもしれない。テレビでは「なんでも鑑定団」という番組が人気のようだが、過去の栄光にすがろうとしている点で、遺産ブームもどこか骨董ブームに似ている、そんな気もするのである。遺産ブームを意味あるものとするためには、成長から成熟へと向かう時代の変化のなかに、過去をあらためて位置付け直さなければなるまい。

富岡製糸場雑感（一）

調査旅行の初日に訪ねた富岡製糸場の話を、最後の最後になって紹介することになってしまったのには、それなりのわけがある。見学して感じたことをどんなふう書き留めればいいのか迷い、何時までたっても書いてみたい文章の輪郭が浮かんでこなかったからである。富岡製糸場を見学した際に、学芸員の方から随分と丁寧な説明を受けたし、そこで受け取った県の企画部世界遺産課が作成したパンフレットもきちんと読んでみた。世界遺産に登録されただけあって、なかなかしっかりとは作られていた。富岡製糸場を紹介した著作などもたくさんあるので、調査旅行からの帰宅後にあれこれと目を通してみた。事実に関する事柄についてはいまさら変えようもないので、だいたい似たような話があちこちに登場していた。そのことをここであらためて繰り返して紹介してみても、あまり意味はないような気がする。だから何を書けばいいのか迷ったのである。これが一つ目の迷いである。

それともう一つは、富岡製糸場を見学した際に抱いた違和感の正体が、よく掴めなかったからである。はっきりとした違和感であれば、話は案外簡単なのかもしれない。その正体を時間を掛けて探求しさえすれば、それで問題は一応解決するからである。しかしながら、私の抱いた違和感は何ともぼんやりしたものだったので、いつまで経ってもその姿形が鮮明にならなかった。今風に言えば、モヤモヤ感とでもなるのであろうか。すっきりしない。だから困ったのである。

日本の政府や国民や地元の人々、そしてまた見学に訪れる人々は、この世界遺産を果たしてどんなものとして受け止めているのであろうか。我々を乗せたバスの駐車場は製糸場の入口から離れたところにあつたので、少しばかり町並みを歩いたのだが、道路の両側には土産物屋がたくさん並んでいた。もしかしたら、富岡製糸場は地元にとって誉れ高い観光施設と化しているのかもしれない。それがおかしいとまで断定的に言うつもりは毛頭ないのだが、それでもどうも気になる。広大な敷地のなかに足を踏み入れれば、当時最新鋭の設備を誇った製糸技術や、さまざまな建造物に関する紹介はふんだんにあるのだが、新たに導入された人事・労務管理の

現実や、そこで働いていた人々の実態が、今一つよく分からない。果たしてどんなものだったのであろうか、フランスから輸入された近代的な工場制度のもとにあったので、「労働条件は思いの外恵まれていた」といったイメージだけが先行していて、この製糸場で働いていた人間の姿がどこにも見当たらないようにも思えたのである。

あるいはまた、明治期の日本における最大の輸出品であった生糸が、殖産興業政策に沿って日本の近代化に大きな役割を果たしたことは間違いないのだが、そのことはまた、富国強兵政策を支えることにもなっていて、日本の軍事大国化への先鞭を付けたことなどには触れなくていいのだろうか、などと思ったりもした。俗に言う「絹と軍艦」を巡る話である。総じて言えば、日本の近代化を成し遂げた明治期の日本を、ほぼ手放しで称揚しているだけでいいのだろうか、そんな違和感が何時までも消えなかったのである。こんな大きなテーマへと連なるような違和感であっては、不勉強な私がぼんやりと佇んでいるだけだったのは当然であったのかもしれない。

こうした違和感に何とかけりをつけようともがいてきたのだが、土壇場になって考えが変わった。論文を書いているわけではないのだから、無理にけりを付けなくてもいいのではないのか、ふとそんな気になったのである。今回実施された社会科学研究所の調査は、「近代化遺産を通して学ぶ社会変化」がテーマとなっており、これから先の調査もこのテーマに沿って企画されていくはずなので、初回から結論じみた話にいつまでも拘らずに、この後ゆっくりと考えていくことにした。私にはあれこれの欠点があるが、そのうちのひとつが結論を急ぎ過ぎることである。周りからもよくそう言われる。この年まで来るとなかなか治らないなどと言いたくもなるが、そう言ってしまっちは年寄りの居直りに過ぎなかろう。武田砂鉄さんの著作のタイトルの表現を使わせてもらうなら、「紋切型社会」における「わかりやすさの罪」に陥る危険性も考えなければならないということか。結論を急ぎすぎないのも大事なことである。年を取ることによって身に付けることができる年の功とは、そうしたものを言うのであろう。

製糸場で受け取ったパンフレットによれば、「富岡製糸場と絹産業遺産群」の世界遺産としての価値は、「高品質生糸の大量生産を実現して絹産業の発展をもたらした、日本と他の国々との産業技術の相互交流をしめす好例」であり、「西欧から導入した器械製糸技術を発展させるとともに養蚕業の技術革新を行い、それらの技術を今度は世界各国に広め」たところにあると紹介されている。世界遺産として登録されたのは、富岡製糸場だけではない。絹産業遺産群とあることから分かるように、富岡製糸場を核としながら、近代養蚕農家の原型となり、通風を重視した「清涼育」を大成した田島弥平の旧宅、近代養蚕法の標準となった「清温育」が開発された高山社の跡、日本最大規模の蚕種貯蔵施設であった荒船風穴が含まれており、それらは相互に関連し合って、良質な繭の開発と普及に貢献したのだという。

これらの遺産群が、「生糸生産の各過程における技術革新の主要な舞台であり、さらに教育や出版、取引などを通じて全国に大きな影響を与え」たとも記されていた。こうした記述からも分かるように、もともと富岡製糸場の世界遺産への登録にあたっては、製糸業の発展にかかわる技術交流や技術革新に焦点が当てられており、そうした領域にかかわる個人（例えば、お雇い外国人技術者のブリュナ、初代場長の尾高惇忠、新しい養蚕法を研究した田島弥平、高山社を設立した高山長五郎など）は登場するものの、無名の働く人々に関する記述はまったくない。世界遺産の登録に当たっての上記のような経緯からすれば、それはある意味当然のことだったのかもしれない。しかしながら、この私には人間の労働があつてこそその技術ではないのかといった、素朴な思い込みがいつまでたっても消えない。大学に転職する前、(財)労働科学研究所に15年ほど勤務していたこともあり、そこでは労働の現場の重要性を叩き込まれたことも影響しているのだろう。人々は働くことによって生きていく。その働き方が今で言う持続可能性を持たないような働き方であってはならない、富岡製糸場を見学しながら思っていたことは、そんなことであつた。

富岡製糸場雑感（二）

当時の富岡製糸場における工女の実態に関する話となると、必ず持ち出されるのが和田英(わだ・えい、旧姓横田)の『富岡日記』(ちくま文庫、2014年)である。製糸場の売店にも置いてあつたので、購入し帰宅してから読んでみた。絹製品のお土産は高価なので私などには手が出ないが、文庫本ぐらいなら買える。伝習工女として働いていた彼女の日記は、当時の製糸場の実情と工女たちの息吹を生き生きと伝えていて、確かに興味深い。親が松代藩士のわずか17歳(数え年で17なので、満では15歳)であつたこの娘は、官営の巨大な製糸場まで親元から皆とともに歩いてやって来る。そして、製糸場に入場して驚愕するのである。「この繰場(くりば)の有様を一目見ました時の驚きはとても筆にも言葉にも尽くされません」と、その時の驚きようを素直に書き留めている。威容を誇るレンガ造りの巨大な工場は、その大きさ自体で幼い工女たちを圧倒していくのである。そして彼女は、「夢の如く」に思うとともに「何となく恐ろしい」とも感じたのであつた。当時この工場を見るために日本の各地から見学者が訪れたというぐらいだから、その驚きはいかほどであつたろうか。

この最新鋭の工場は、「行儀正しく一人も脇目もせず業に就き居る」ことを、そしてまた、無言で作業することを求めたようである。労働の現場における工場規律の徹底である。こうして工女たちは、高品質の生糸を繰る技術を習得するとともに、器械の動きに従属した不自由な働き方を身に付けていったのであろう。これまで日本の労働問題に少しばかり関心を払ってきた

こともあってなのか、私は彼女が感じたというその恐ろしさの方がとりわけ気になった。文庫本となった先の『富岡日記』には、斎藤美奈子さんの「近代の女子労働史からみた『富岡日記』」と題した解説が付されている。この解説がすこぶると言ってもいいほど興味深い。関心のある方には、是非とも全文に目を通してもらいたいのだが、なかでも目を引いたのは、「富岡と『女工哀史』は別なのか」と言う小見出しが付された一文である。いささか長くなるがそのまま紹介してみる。

フランスの工場に準じた富岡製糸場は就労規則もフランス式で、年季奉公のような日本の伝統的な労働形態と比べると、はるかに近代的でした。就業は朝7時から午後4時半まで。9時から30分、12時から1時間、午後にも15分の休憩時間があり、実働は7時間45分。灯下の労働は品質に影響するというブリュナの考えから、作業はすべて自然光の中で行われました。週一度の日曜日は休み。猛暑の時期には昼の休憩時間を増やすなどの措置がとられ、夏と冬には休暇もとれました。しかしながら、こうした「恵まれた」労働環境は富岡製糸場からはじまる製糸業の長い歴史の中では、ほんの一時期の「短い春」だったといわなければなりません。日清戦争を契機に生糸が輸出産業として成長し、製糸業が資本主義的性格を強めるにしたがって、製糸業界の労働条件は劣化の一途をたどったからです。

地域や会社によって濃淡はあったにせよ、労働時間は短くて12時間、ときには14～15時間におよび、賃金は時給計算ではなく出来高払い制。「労働時間の如き、忙しき時は朝床を出て直に業に服し、夜業12時に及ぶこと稀ならず。(略)その職工の境遇にして憐れむべき者を挙げれば、製糸職工第一たるべし」と横山源之助が『日本の下層社会』に書いたのは富岡の開業から約四半世紀後のことです。採算度外視で模範的な労働環境を目指していた富岡製糸場も、ブリュナの帰国後は生産性重視の姿勢に転じ、1893(明治26)年に三井に払い下げられると、労働時間の延長、等級制から出来高制への賃金体系の改変など、労働強化が図られています。

したがって、横田英が在籍した官営時代だけを取り上げて「女工と聞けば『女工哀史』や『野麦峠』の暗いイメージを思い起こすかもしれません。しかし、富岡製糸場にはそのような雰囲気はありませんでした(自由主義史観で知られた藤岡信勝の一文である—引用者注)などことさらに強調するのは、富岡からはじまる製糸労働史、ないし女子労働史の全体像を無視した態度にほかなりません。「富岡日記」を手にした私たちがいま考えるべきは、近代日本の資本主義発達史の中で、富岡製糸場がどのような役割を果たしたかです。富岡は日本の殖産興業にたしかに貢献しました。富岡製糸場が導入し、日本式に改良された器械製糸は生糸の大量生産を可能にし、20世紀の初頭には天蚕(ヤママユと呼ばれる蛾の別名—引用者注)生産の先進国だった中国やイタリアと日本は肩を並べ、やがて追い越すまでになります。しかし、日本経済の屋

台骨を支える基幹産業の担い手が10代の少女たちだったことを考えると、一見模範的に思える富岡製糸場にも、後世の歪みを生む素地があったことは否定できません。

こうした斎藤さんのきわめて重要な指摘は、富岡製糸場での展示を見ても、顧みられたような気配すら感じられなかった。織都の桐生でも同じである。世界遺産登録後に出版された富岡製糸場を紹介した著作なども、ほとんど同じである。見学場所にあった掲示物を丹念に読めば、そうした記述はもしかしたらあったのかもしれないが、私には見付けることができなかった。官営の富岡製糸場が模範的な工場であったことのみが振り返られ、強調されていたのである。問題となるのは、『富岡日記』をどのようなものとして位置付けたいのか、そんなところにあるのだろう。たまたま手元に置いてあった立花雄一著の『明治下層記録文学』（ちくま文庫、2002年）を広げていたら、次のような記述にぶつかった。「記録者は日本の工女第一号である。ちいさな経営体ながら、そこの娘である。同時に指導手ほつき者である。それは『富岡日記』の微妙な位置をしめしている。『富岡日記』は被雇傭者、下積みの工女の記録ではない。官製と民間、経営者と工女の間であって、日本の製糸工場の夜明けの生成のさまが微細に綴られてある、『富岡日記』の価値はそのあたりにある」。

『富岡日記』の微妙な位置」という表現が何とも気になった。私を感じたぼんやりとした違和感とも相通するような感じもしたのである。ところで、あれこれの資料を眺めているうちにふと気が付いたことなのだが、「工女」と「女工」はどう違うのか、「器械」と「機械」はどう違うのかを知りたくなった。しかしながら、そうしたことに関しても研究者は既にきちんと調べ上げているのである。そのあたりのことは、玉川寛治著の『製糸工女と富国強兵の時代—生糸が支えた日本資本主義—』（新日本出版社、2002年）に詳しい。結論から言えば、どちらにも「意味内容に本質的な違いはない」とのことである。私が紹介したいのは、玉川さんが明らかにしたその結論だけではない。日本の製糸業に関しては、微に入り細に渡った過去の膨大な研究があるということ、言いたかったのである。世界遺産の登録に目を奪われてしまって、過去の研究上の遺産がないがしろにされてはならない、ふとそんなことを言ってみたくもなった。

富岡製糸場雑感（三）

桐生の織物参考館“紫”に出掛けた際に、大日本製糸会会頭という肩書を持つ高木賢という方の著作を入手した。タイトルが『日本の蚕糸のものがたり』（大成出版社、2014年）であったし、私のような素人にも読めそうな作りだったので、購入しておいた。著者の問題関心は、

「それぞれの時代のある特定の分野についての著作物はありますが、開国以後の近代の日本の蚕糸業の歴史—『通史』—ともいうべきものを全体としてバランスよく提示してきたとは言えない」というところにある。だから私などが読む気になったのである。この本には、次のようなささか気になる記述がある。紹介してみよう。

1911（明治44）年、労働時間の制限を定めた工場法が制定されましたが、製糸業者の多くが工場法が定めようとした1日の労働時間の上限12時間に反対であったことは、製糸業が長時間労働に依存していたことの何よりの証明といえましょう。なお、綿織物業においては機械化が進展し、昼夜2交代制がとられるようになっていました。また、賃金が1年に1回払いというところが多く、賃金支払いの時期までの工女に対する前貸し金と相殺するといくらも手元に残らないとか、工女側の借越しになったという事例も見られたようです。

総じて言えば、「優等糸」を目指す企業には、いい糸を作るためには工女を大切にしなければ、という考えがあり、それなりの処遇もされたようですが、「普通糸」の量産を目指す企業の場合、売れる時にできるだけ作らなければ長時間労働につながっていく傾向がみられたことは否定できないと思われます。しかし、過剰な人口を抱えていた当時の日本において、製糸業が明治末期から昭和前期までの間、約20万人ないし40万人の雇用の場を提供していたことも事実であり、今日の時点において今日の価値観からみても安易な批判は避けるべきものと思います。

わずかに登場した工女の話なのだが、「安易な批判は避けるべき」であると一蹴されている。確かに安易な批判であっては問題であろうが、どうもそこには、批判自体が既に安易だと思われるような節も感じられる。これでは、工女たちの話が登場する余地はなかろう。現実を見れば、官営工場時代であっても実情はなかなか厳しいものがあつた。斎藤さんの言う「短い春」においてさえ、その後の「長い冬」が既に予感されていたと言うべきであろうか。富岡製糸場の世界遺産登録に大きな役割を果たした今井幹夫（富岡製糸場総合研究センター所長）という方の、『富岡製糸場と絹産業遺産群』（ベスト新書、2014年）には、次のような記述がある。

世界最大規模での操業は、いざ始めてみると、関係者でも驚くほどの状況でした。「富岡製糸場記」の中にその様子を記した一節があります。現代の言葉で要約すると次のような内容です。「場内では、釜からのぼる湯気は煙や霧のような濃さで、人の顔も見分けられないほどだった。蒸気が沸騰する音や鉄の輪が回転する響きはすさまじく、波濤のように、風雨のように押し寄せてくるので、しゃべっている言葉は聞こえない。身振り手振りやどなり声を上げてようやく用をなした」。石炭を材料とする蒸気エンジンによって動く繰糸機の騒音や300人繰りの繭を煮

る釜から立ちのぼる蒸気の様子が臨場感をもって描かれています。

こうした記述を読むと、和田英が初めて製糸場を訪れた際に感じた「何となく恐ろしい」といった気持も、宜なるかなと思えるのである。「関係者でも驚くほどの状況」であった製糸場での労働が、各地から集められた若い工女たちに素直に受容されていったとはとても思えない。今井さんの著作には、次のような記述もある。こちらも参考になるので合わせて紹介しておきたい。

工女たちには、1～3年という勤務期間が提示されていました。つまり、1年経つまでは「私事都合では」退職できない規則になっていたのです。それにもかかわらず、1年未満で辞めてしまう人がとても多く、長野・埼玉県から入場した工女の記録を集めた「工女名簿」によると、創業年の明治5年にこの地域から入場した工女の三分の二が1年以内で辞めています。早期退職の理由は、本当のところは集団生活や規定された労働時間になじめないこと、細かな就業規則、楽しみのなさ、給料の低さ一などのようですが、表向きには、「親が病気になった」など嘘の大義名分を立てて国元へ帰って行きました。

明治8(1875)年に経営診断に訪れた速水堅曹(のちの所長)はその報告の中で、経営赤字の原因の一つとして、「工女たちの仕事が終わるのは夜になる。雑談をすれば老女に怒られ、なんの楽しみもない。みな口々に言っているのは「こんなことをして何になる。お嫁に行っても活かす場はない」ということだ」と述べ、多くの工女が任期前に辞めてしまうことを挙げています。また、地元製糸場が建設されたために富岡でのノウハウを持って帰郷するように自治体から求められたケースもありました。一日も早く、富岡での研修の成果を持ち帰ってほしかったのでしょう。

『富岡日記』は貴重な歴史的資料であるが、それだけで工女の労働の全貌を語るには無理があるということなのかもしれない。確かにそこには、「厳しい訓練と労働条件のなかでも、新しい技術を少しでも早く完全にマスターして国産の礎として役立てようとする、いわば楽観的な明るさ、いささか難しく言えば「近代的知性の自生的展開」(滝沢秀樹、前掲書)がある。初めて日本に導入された工場制度のもとで、「一等工女」めざして健気に頑張り、その後各地で製糸業の発展に貢献した和田英のような工女たちの姿があったことは間違いない。その奮闘の成果が、急速に「大砲」と「軍艦」へと転じていったところに、日本の近代化の影や闇が潜んでいたのかもしれない。今「いた」と過去形で書いたが、その影や闇は、現在においても日本社会の深部を規定しているものなのかもしれない。片手間で勉強していたら、高崎経済大学附

属研究所編の『近代群馬の蚕糸業』（日本経済評論社、1999年）という本が出版されていることを知った。この本に、長谷川秀男さんという方の「富岡製糸場と近代産業の育成—お雇い外国人を中心に—」というタイトルの興味深い論文が収録されている。そこで長谷川さんは、以下のようなことを呟かれている。そこに素直に共感できたのは、私も似たようなことを感じていたからだろう。最後に紹介しておきたくなった。

明治治維新による日本の近代化はフランス革命や市民革命等を経て実現した西欧の近代化よりもおよそ百年遅れていた。この遅れを埋めるために、富国強兵政策が最善であったのであろうか。社会や個人の近代化、民主化に主眼をおくことはなぜできなかったのだろうか。少なくとも、富国強兵的な国家の近代化という枠組みの中で、それに必要な限りにおいて社会や個人の近代化、民主化を考えるのではなく、第二次世界大戦の敗戦による「外からの民主化」以前に、近代化の発展過程で社会や個人の民主化も実現して欲しかったと思う。

上州紀行補遺

私は今回の調査旅行の帰りに深谷に寄って、そこでもう一泊するつもりでいた。最終日の午後「碓氷峠鉄道文化むら」から高崎に戻って、調査旅行の一行はそこで解散となった。一人身となったので、各駅停車の高崎線に乗って深谷に向かうことにした。そうしたら、同じ列車で東京に戻るといふMさんと一緒になった。あれこれの思い出話に花が咲いているうちに深谷に着いた。30分ほどだから、まさにあつという間である。帰宅の途中深谷に寄ろうと思っていたのには、もちろんながらわけがある。私が生まれたのは埼玉県の深谷市なので、是非一度訪ねてみたいとかねてから思っていたためである。私が深谷にいたのは生後半年ばかりであり、その後は福島県の福島市で育った。だから、略歴を書く必要があるような時には、「埼玉県深谷市で生まれ、その後福島県福島市で育つ」と書いてきた。生後半年程しかいなかったところに愛着などわくはずもないのに、いつ頃からか生まれた地を訪ねてみたいなどと思うようになった。きっと年の所為であるに違いない。

今回高崎経由であちこちに出掛けることになったので、こんな機会はないと思い、深谷駅前のビジネスホテルに宿泊予約を入れておいた。午後とは言っても夕方にはまだ間がある時間に深谷に着いた。改札口を出た際にも立派な駅だと思ったが、駅舎を外から眺めたらそのレトロモダンな作りに目を奪われた。駅前には人通りもクルマも少なく静かな町だが、そうした場所にあるとは思えないほど立派な作りである。ネットで調べてみたら、この駅舎は1996年に改築されており、東京駅が深谷産の煉瓦を使用していたことにちなんで東京駅を模しているのだ

という。記事をもう少し詳しく紹介してみる。

改装された現在の駅舎は東京駅の赤レンガ駅舎をモチーフにしたデザインで、「ミニ東京駅」とも呼ばれる。これは、大正時代に竣工した東京駅の丸の内口駅舎の建築時に、深谷にあった日本煉瓦製造で製造された煉瓦が使われた史実にちなむ。ただし、この深谷駅の駅舎自体はレンガ構造ではなく、コンクリート壁面の一面にレンガ風のタイルを貼ることによって東京駅に似せている（これは、線路を跨ぐ駅舎からレンガが剥落する可能性が指摘されたためである—引用者注）。本物のレンガではないものの、夜間のライトアップ時を含めて人気は高く、撮影のために遠方から訪れる鉄道ファンや観光客が絶えない。

そんな駅舎だったとはまったく知らなかったが、他にも知らなかったことはあった。NHKの大河ドラマ「青天を衝け」に登場した渋沢栄一の出生地であり、彼の記念館まで建てられていたことである。それを知ったからといって、この際だから出掛けてみようなどとはまったく思わなかったのだが…。ホテルの部屋で一息入れてから周りをぶらついてみた。カメラマン気取りで駅舎を撮影したのは言うまでもない。人影もまばらな駅の側には小さな川も流れており、桜の木も植えられていて、素朴すぎるほど素朴な風景である。知らなかったことのついでに書けば、深谷が昔は中山道の宿場町で、結構な賑わいを見せていたことである。こちらネットの知識を紹介するだけの話だが、そこにはこんなふうに書かれていた。「深谷宿（ふかやじゅく）は、中山道（木曾街道とも言う）六十九次のうち江戸から数えて9番目の宿場。現在の埼玉県深谷市にあたる。深谷宿は中山道で最大規模の宿場」。商人が多かったこともあって、飯盛女も大勢いて遊郭もあり、江戸を出立して2番目の宿を求める人で大いに栄えたとのこと。浮世絵師の英泉が描いた『岐阻（きそ）街道深谷之駅』はよく知られているようで、深谷宿の飯盛女が描かれている。渋沢栄一よりもこちらの方に興味が沸いた。

そんな話はともかく、夕飯にはまだ間があったので、近くをうろついていたら古本屋と雑貨屋を兼ねた店を見つけた。覗いてみたら店の主人が気さくな人で、あれこれと古本談義を交わした。店を開いてまだ間がないらしく、顔を出してくれた客と話をしたかったのであろう。こちらに少しばかり応援する気持ちが沸いてきたこともあって、復刊された室生犀星の『動物詩集』などを買った。そうしたら、親切にも少し離れたところにある大きな古本屋の場所まで教えてくれた。教えてくれたと言えば、ホテルの近くにあった小綺麗な蕎麦屋で飲み食いしようと思っただけで出掛けたら、お酒は出せないとのこと。そこまでであればどうということのない話だが、飲みたいたったらあそこで飲めますよと、店から顔を出してわざわざ居酒屋の場所まで教えてくれた。何とも親切的な振る舞いである。

翌日には深谷商業高校に顔を出してみた。私が深谷で生まれたのは、当時父がその高校の教員をしていたからである。深谷では上の姉も生まれたが、私の生まれる1年前には長男がこの深谷で1歳で亡くなっている。陽光が眩しく汗ばむような天気であった。しばらく歩いて深谷商業高校に辿り着いた。ここに二層楼と呼ばれる記念館があることは知っていた。実物を目にしたところ、実に堂々とした立派な建物である。この建物は1922（大正11）年に建設されており、フレンチ・ルネサンス様式を基調とした木造2階建の瓦葺きの校舎だとのこと。中央には尖塔があり、左右対称に造られている。県内で唯一、完全な形で残る大正期の木造校舎で、2000年に国の登録有形文化財に指定されている。建物の老朽化が進んでいたため修復工事が行われた。復元調査で校舎の外壁が白色系ではなく緑色だったことが判明したため、外壁は創建当時の緑色に塗り直され、校舎は大正時代の姿に忠実に復元されたという。外から見ると、緑色の外観と尖塔が印象的であった。記念館の入口から中に入ろうとしたら、その日は高校の合格発表の日であったようで、入構を断られた。仕方がないので、正門に回り父母のような顔をして堂々と入れさせてもらった。構内のベンチに座り、深谷商業自慢の遺産である記念館を眺めながら、当時まだ若かった父や母を偲んでみた。私も40歳前後の頃は暮らしに追われて悪戦苦闘していたから、両親もきっと同じだったろうと思ったりもした。

帰路に唐沢川の土手を眺め、中山道だった通りを歩いた。唐沢川の土手は桜並木になっており、もうしばらくすれば大勢の人が訪れるに違いない。前日に教えてもらった古本屋に寄ろうと思って、レンガ造りの煙突を目当てに街中を散策していたら、古本屋の側に来て「深谷シネマ館」の看板が目に入った。地元のミニシアターである。深谷シネマがあったのは七ツ梅酒造の酒蔵跡だったが、ここには、飲食店や雑貨屋、古本屋などの店舗も入っており、映画を楽しんだ観客が歓談できるスペースにもなっていた。何とお目当ての古本屋の側にシネマ館があったというわけである。こんな場所を維持している深谷を少しばかり羨ましくも感じた。

映画を観るような時間はなかったもので、館内の休憩スペースでコーヒーを飲んだ。たまたま近くに同年配とおぼしき方がおられたので、私が深谷を訪ねたわけなどを話してみたら、当時の住所はわかりますかと問われた。戸籍謄本にあった住所を伝えたところ、そこは昔駅の側だったとのこと。名刺をもらって知ったのだが、この方が深谷シネマ館の館長である竹石研二さんだった。館内には山田洋次監督の色紙も飾られていた。「こんな時代だからこそ映画は人々の喜びと楽しみになると、信じています」と書かれていた。すぐ側の古本屋にも顔を出したが、その主人はたいへん若い方だった。かなり広い古本屋だったので、すべてをゆっくりと眺めることは叶わなかったが、折角だからと2冊ほど古本を購入した。荷物が膨らむことは分かっていたが、後は電車に乗るだけなので、それでもいいかと思ったのである。店の若い主人とすこしばかり雑談を交わし、前日入りそびれた蕎麦屋で遅い昼食をとり、満足して帰路に就いた。

深谷はとてもいいところである、こちらがそう思ったがっているから、そんなふう感じたに
違いないのではあるが…。